

# DRAMA かながわ

《神奈川県演劇連盟》 ★横浜市中区福富町西通り52 TEL045-261-4866

## 飯田克衛さんの

## 横浜文化賞受賞祝う会、盛会に



神奈川県演劇連盟の前理事長、飯田克衛さんが06年度横浜文化賞を受賞し、その祝賀会が07年1月15日ベイシェラトンホテルで盛会のうちに開かれました。参加者は140名ののぼり、地元横浜、神奈川ばかりでなく遠方からもおいでいただき、飯田さんの長年の誠実で真摯な活動を反映していて多彩でした。

ほとんどの参加者がこの受賞に思いを寄せていたのでしょう、ご祝辞をいただいた皆さまのお話はどれも温かいものでした。お話しは横浜演劇研究所の創設時代のことから、今日のみなとYOKOHAMA演劇祭の前身、10年続いた横浜アートLIVEでの実行委員長としての役割、神奈川県演劇連盟でのこと、復活した横浜世界演劇祭2006実行委員会のことなど多方面にわたり、その活動分野はアマチュア演劇を越えてまさしく横浜・神奈川の演劇状況を切り開く先頭に立ち続けた姿を浮

き彫りにしていました。

お話しの中で語られた印象に残る言葉はたくさんありますが、大変地味な活動を続けてきた飯田さんに光を当てた受賞の意味の大きさ、横浜演劇研究所が日本の演劇界の中でも大きなウエイトを占める拠点であること、実際にこの研究所の活動を支える多くの演劇に親しむ人が育ったこと、そして今日の様々なフェスティバルの実行委員長を務めるなど、今なお現場で先頭に立って支えていることなどを再認識させられるものでした。

なかでも2009年に行われる横浜開港150周年にあたっての事業に、横浜演劇研究所と飯田さんを中心にした新しい事業が動き始めている報告がされました。そして横浜文化賞受賞が飯田さんの引退の花道ではなく、新しい出発の日なのだと報告され、

この祝賀会自体が、飯田さんと共に生きて、うごめいている演劇人の集合体という錯覚を起こさせるほど、横浜・神奈川の演劇人の活力をみせていました。

神奈川県演劇連盟にとっては、育ての親ともいう程の人ですが、これを機に神奈川県で演劇を続けてきた歴史を振り返り、なにが、どういう意志があれば、80才を越えてまで情熱的に演劇に関われるのかを学んでいくことが必要なのだろうと考えさせられました。

飯田さんが益々健康で第一線に立ちつつ、神奈川県演劇連盟の仕事にも忌憚のない批評と檄を飛ばしてほしいものだったものでした。

(山本忠利)



## 劇団葡萄座

「復刻版★熱海殺人事件」

作/つかこうへい・演出/山本伸二

2006年10月14日・15日

青少年センター・多目的プラザ



笑いあり涙ありの、あつという間の二時間の作品だった。それは、心地よいテンポの持ち方によるのだろう。途切れることのない、しかし見ている方が置いて行かれることのない、自然な流れがあった。

役者もキャラクターにぴったりはまっている。なので、動きや表情がいきいきとしていた。登場人物の設定年齢と役者の実年齢に、ややギャップはあったものの、そこは音響でカバーしているようだ。一昔前の歌謡曲を流すことで、役者が見事に榮える。

ただ、セリフが聞き取れないところはいくつかあった。あのテンポと共に、セリフがはっきり聞こえれば、更に笑いの起こる作品であるに違いないだろう。

それにしても、役者4人でこれだけ迫力のある劇を作り上げた事に感動する。今思い出してみても笑ってしまう、そんな後味のよい作品だった。

劇団横綱チュチュ 石渡伴子

## 劇団ささく座

「白い家」

作/松本淳子・演出/西山慈恩

「くちなしの頃」

作・演出/樋口晶子

2006年10月21日・22日

青少年センター・多目的プラザ



母が娘の家を訪ねている。なにげない日常の会話が続く。「ちょっとだるいなー」と思っていたら、娘の会話がとげとげしくなっていく。母親の満たされない愛が娘への嫉妬となり、心が青大将(蛇。ふつうは鬼だが)となって娘への虐待に向かわせた、その事実が今、娘の口から次々と話されるのである。

娘は幼い頃からのトラウマを今も引きずっている。自分の心が何色にもそまらなくなつて白のままになっていることへの自らのジレンマも語られていく…。心の闇の変化という難しい芝居を二人とも集中力で客をどンドン引っ張っていく力はすごかった。屋久島出身という作者が会場に見受けられた。若くて美しい人である。その人がこういう人間の内側を見すえたドラマを書くのもドラマチックに思えた。今子供が親から虐待を受けている痛ましいニュースが多い。その子供たちが大人になったらどんな人になるのだろう。人間を信じた。



もう一本はロマンチック・ラブ・コメディーとしても言うのでしょうか、笑える楽しい芝居でした。こんな二本立てが出来る「ささく座」、期待以上でした。

京浜協同劇団 渡辺高志

## おことわり

本来は昨年秋の公演をすべて掲載すべきところ、編集部の作業遅れから原稿を集めきっておりません。申し訳ありませんが次の公演の劇評は次回に送りました。

9月～12月G/9Project

「ラッシュアワー」

10月28、29日劇団こゆるぎ座

「唐人お吉伝・らしゃめん」

11月4、5日 劇団麦の会

「Dの呼ぶ声」

11月11、12日劇団蒼い群

「月光の夏」

12月2、3日 劇団横浜にゆうくりあ

「横センおやじの旗のもと」

## 劇団川崎演劇塾

「夏きたりなば」

作/ふくたちつよし・演出/小川雅功

2006年11月17日～19日

相鉄本多劇場



ふたくちつよし氏の作品も、川崎演劇塾の舞台も初めて観た次第で、真っ白な状態での観劇でした。

チラシに書かれた導入的紹介文から、砂本量の「レンタル・ファミリー」の如き話かと想像していました。確かに芝居の最初の段階では、そのように展開していたものが、違った形に劇的展開をみせ、休憩無し1時間半が長いとは思わない出来栄でした。

不勉強を恥じて、インターネットで検索したところ、この作品は2003年に書かれたもので、プロの劇団を含め、数多くの劇団が「家族のきずな・家庭の温もりがテーマ」と位置づけて上演しているようで、今回の舞台もそれに沿って創られていて、客席の中で目頭を押さえていた方がかなり居たことから、成功した舞台と言え。

だが、面白可笑しいものや、最後には必ず救いのあるものが、テレビや映画で蔓延しているだけに、商業的成果に囚われることのないアマチュア劇団の立場を逆手にとって、お涙頂戴してのカタルシスを排した、「血の繋がった者への憎悪と愛」の乾いた物語として、創れなかったかを考えさせられたのは私だけであつたらうか。

妻役を演じた藤田るみ(ダブルキャストであつたので、拝見したものがチラシ通りだと理解すると)さんの芝居の後半部分の演技に引き込まれるものがあ

っただけに、そのような芝居とした場合の、解決のつかない葛藤を彼女がどのように演じたかを見たかったということもありました。

しかし、これは台本の問題ともいえますが……

劇団ささく座 西山慈恩



劇団蒼生樹「あっぱれ狸御殿」  
脚本協力/中村俊夫・演出/濱田重行  
2006年12月15日～17日



狸の隠れ里から御本尊を盗み出して、その力を使い人間社会で成功しようと暴れ回る二匹の狸という、いかにも「まんが日本昔ばなし」に出てきそうな舞台設定に、振り込め詐欺やら株やらの現代の話題をからませながら、笑いあり、踊りありという、歳忘れに相応しい内容でした。パンフレットに書かれたキーワードが、「ばかばかしい」。確かに何ともばかばかしいお話で、観劇したあとにしみじみと残る余韻というものには全く無縁で、「今年も色々あったよな。でもさ、そんなこと小さい、小さい。どーでもいいじゃん。ばかばかしい！」って気分させてくれる芝居でした。細かい演出にもばかばかしさを感じさせる仕掛けが随所に見られました。

注がせるたびに大きくなり、最後にはポリタンクとポンプになる徳利なんぞ、一体何の意味があるんだ？ばかばかしい、でも、笑える！って感じです。また、小道具の種類や数、動く仕掛けなど、小道具を担当することが多い自分から見ると「大変だったろうな」と感心しました。残念だったのは、前半のセリフの頻繁な飛びによるリズムの乱れと、場が変わらない割に長い暗転で、気分が途切れてしまうことがあったことです。

劇団かに座 折笠安彦

劇団かに座  
「今度は愛妻家」  
作/中谷まゆみ・演出/馬場秀彦  
2006年11月11日(土)14時



今回の公演では今までの「かに座」の公演では見られない斬新な試みが随所になされているのに驚かされた。それは、作品の選択から若手中心の配役・新しい演出家の採用等である。それらの点から考えると今回の公演はある意味で試験的な意味を含んでいたのかもしれない。まず、公演の感想を纏めてしまえば「面白い」の一言である。作品自身の特徴である強烈なキャラクターを持つ役柄を出演者達が上手く演じ、全体としての構成もしっかりと纏められていた。随所で観客に訴えかけてくる場面なども的確に表現されていたように思われる。内容的には少し現実離れた展開の場面もあったが、そのような部分も上手く気づかれないようにさりりと進められていたところなども感心させられた。随所で笑わせてもらえて、最後には涙がこみあげてくる充実した2時間であった。

葡萄座 宮城忠

劇団横綱チュチュ  
「MANI MANI」  
作/菱倉あゆみ・演出/団のぼる  
2006年11月25日(土)13時



オカマのマスターのいる店に勤めている女性たちと子供たちという異色な取り合わせがハラハラ、ドキドキさせるお芝居でした。すじ立てがとても綺麗に整っているのが最後まで素直に見ることができました。

中心に若い女性を置いてのまとめがとてもうまくいっていたように思います。子供たちにはいつも学ばされることが演技において多いということが今回も実証されたいい舞台でした。子供たちにはたくましく、相手を重んじるような大人になって欲しいものだと帰る道々思った次第です。いいお芝居をありがとうございました。

劇団蒼い群 村田 次郎

京浜協同劇団  
「ミスターニー！ 天空百三十尺の男」  
作/和田庸子・演出/杉本孝司(東京芸術座)  
2006年11月24日～26日  
スペース京浜



久しぶりの劇団創作劇、しかも初台本で取り組んだテーマが「これぞ京浜」という社会派ドラマ。演出に東京芸術座の杉本氏を迎え、協力者を含め出演者総数30余名という大作。シンプルかつ効果的な構成舞台がスピーディな舞台展開を可能にし、暗めの照明と相まって観客をドラマの中心である過去の時間へと誘ってくれる。

昭和の初期、川崎富士瓦斯紡績工場で起きた実録「煙突籠城男」の顛末を、当時の社会情勢、庶民の立場、経営者の立場を織り交ぜて分かり易く表現しながら綴ってくれた。

語りとして紹介された煙突男の家族の話を、ドラマ仕立てで見せて欲しかった気はするが、舞台を切り分け、立場の違いを提示してくれたことで、本当にこんなひどい時代があったんだ、と気づかせてくれた。話の先に見えたのは、「おい、今の時代の奴ら！こんな辛い時代にも頑張って生きて奴がいたんだぞ！」という檄。

若い主役の頑張りが印象に残った舞台であった。  
劇団麦の会 山元洋一

2007年度  
神奈川県演劇連盟総会  
日時 4月15日(日)  
総会 午後3時  
交流会 午後5時半  
会場 京浜協同劇団稽古場  
「スペース京浜」  
参加 各劇団代議員3名  
傍聴者は制限なし  
交流会 会費 2千円

第10回県演劇連盟理事会  
日時 3月26日(月)  
午後7時  
場所 県民サポートセンター  
11F

編集後記に変えて  
○すったもんだして「1月号だ  
します。ただし、3月10日に」  
と約束したにもかかわらず遅れ  
てしまいました。申し訳ない。  
なかには早くから原稿を頂いた  
にもかかわらず、進行の遅れか  
ら編集部で紛失した原稿もあ  
り、観劇機会を創り、原稿を書  
いて頂いた方に何とお詫びした  
らよいか、平身低頭、顔も上  
げられません。  
○この間、県演劇連盟でも討  
議され、「編集委員の不足もあ  
るが、抱え込まずに多くの手  
期待し、手伝わってもらう方法  
もある。」とアドバイスを受けた  
にもかかわらず、相変わらず抱  
え込んで悩むこと数日、見るに  
見かねてチュチュの安次嶺さん  
がお手伝いしてくださってい  
ました。お陰をもちまして発行の運  
びとなった次第です。  
○もう4月がそこまで近づいて  
います。気持ち新たに、前を  
向いて諸事に取り組んでいきま  
しょう。先ずは総会です。  
(二)



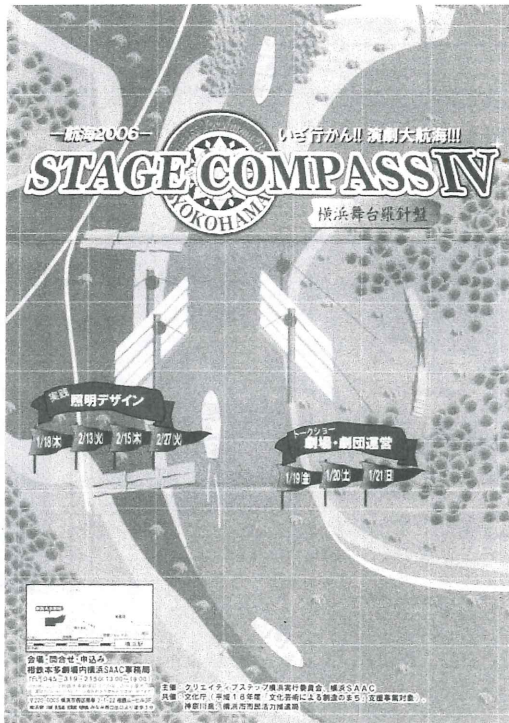
〇〇〇横浜舞台羅針盤(横浜 SAAC 企画)の「県内各地における演劇製作一観客との関わりを中心に、各講師の経験から語ります」

に参加した、超電磁劇団ラニョミリのとのぎひろこさんにその中味を紹介していただいた。●〇●

# もっとお客さんを呼ぶために..

超電磁劇団ラニョミリ とのぎひろこ

どうしたらもっとお客さんを呼べる劇団になれるか・・・、そればかりを考えて、藁をもつかむような気持ちで「神奈川の演劇製作に携わって」という講座を受講した。蒼生樹座長の濱田さん、横浜演劇祭2006年事務局長の団さん、河童座の主宰で、県連の理事長の横田さんの3人のトークは、ものすごい迫力と熱気で、濃密な2時間。正直、本当に大きな手ごたえを感じた。



エネルギーが必要だが、それだけの思いと誇りを持つべきだ。」や、「劇団員がチケットを売るといことは、自分の人生、自分の思いを語れるということだ。」など、実際の経験に裏付けられた深みのある、示唆に富んだ話が後から後から出てきて、ここには書ききれないほどだ。

芝居に携わることの崇高さ、人生かけてそれを担うことの醍醐味に思いをはせることができた。そして集客に手取り早い方法ではなく、地道にしっかりと裾野を広げること、志高く、自分たちが納得できる芝居を作り続けることが大事なのだ痛感した。

そこで私は手始めに、自分の劇団の仲間や、交流のある様々な人たちに、早速ここで学んだ話を吹聴し回っている。「隣のおばちゃん」作戦に負けじとばかりにである。

## 隣のおばあちゃん論争

まずは芝居の社会的責任という話。「演劇は民衆のものであり、世の中を変えることができる。民衆の芝居を創るんだ。だから地域とのかかわりが大事なんだ。」・・・殴られたような衝撃を受けた。目先だけで芝居作りを考えていた自分の浅はかさに気づいた。

そして、いかに客のところに出向くかが客を呼ぶ決め手、という話。「どンドン外に出て行き、いろいろな人と広く付き合い、演劇の裾野を広げるべき。関係者だけ、演劇人だけ、ではだめ。一般の人とどう関わるかだ。隣のおばあちゃんは、芝居は観たことがない。でも日常的なつながりのある濱ちゃんが芝居をやっているならちょっと観てみようかな、という気になる。こういう活動が大事。僕は、一人で1200通の年賀状、800から1000のDMを送っている。」とは濱田さんの名づけて「隣のおばあちゃん論争」だそうである。

## 創る心意気はプロになれ!

他にも、「芝居のレベルを落としてはだめ。アマチュアはプロと違って、生活のためにそれを引き受けなくてもいい自由があるが、創る心意気は、プロでなければいけない。劇団を続けるのはとてつもないエ

とのぎひろこさんが参加した企画は、2007年1月19日(金)に、相鉄本多劇場を会場にして、講師に神奈川演劇連盟理事長の横田和弘氏、横濱世界演劇祭2006実行委員会事務局長の団のぼる氏(当初県演連の前事務局長山本忠利氏のところ、氏の家庭の事情で変更した)及び県演連所属劇団蒼生樹座長の濱田重行氏の3氏を講師として開かれたものである。



ラニョミリHPから

【劇団ラニョミリ紹介】  
正式名称は「超電磁劇団ラニョミリ INTERNATIONAL」という。この名称も06年12月の「TENPAN」公演からで、それまでは「INTER-NATIONAL」はついていなかった。05年11月の第10回公演を機に一旦解散、新たなる出発ということで改名した。川崎市幸区に稽古の拠点を持つ。「TENPAN」は通算11回目の公演。  
この劇団の特徴は何と言っても全てオリジナル作品、しかも果敢に社会問題に切り込んでいくことである。若い劇団はどうしても社会問題から目をそらしがちだが、あえて、そうあえて社会問題と真っ正面から勝負しようという、意気盛んな所をみせるのが魅力である。  
作品は団内の複数のメンバーが書くが、それを演出者を中心に納得行くまで練り上げる。芝居づくりも同じである。納得行くまで稽古を重ねる。だから始めから公演予定日を決めてそれに合わせて間に合わせるということはない。これで納得出来るそうだといいところから会場を押さえ公演体制に入る。スポーツもので身体を鍛える必要があればそういう身体を作るところから始める。一途に納得出来る芝居を目指す。芝居は娯楽であるしリアリズムでもあるというのがリーダーの姿勢だ。